

大学生のスポーツ行動の価値意識に関する一考察

小泉昌幸* 伊藤巨志**

(平成16年10月29日 受理)

A Study of the Value Consciousness about College Students' Sports Participation

Masayuki KOIZUMI* Kiyoshi ITOH**

The purpose of this study is to clarify about the value consciousness about college students' sports participation. In order to carry out this survey, a questionnaire was used, which 281 students replied.

The main results were as follows:

1. Students who accepted the value of sports activities in five categories proved them. It is required for students to teach the importance of the sports activities in order to promote those activities.
2. The value consciousness about the sports of six categories of "play", "view", "watch", "read", "support", and "talk" showed the high value. Teachers have to develop the lesson for guiding students to change their value consciousness of sports.
3. For a creative reason, students have to progress good sports environment themselves, and sports activities must be supported.

Key words: "play"sports, "view"sports, "watch"sports, "read"sports, "support"sports, and "talk"sports, value consciousness, sport education

1. はじめに

価値とは、主体の欲求を満たす限りにおいて「のぞましきもの」the desirableではなく、「のぞましさ」desirability(その程度)であると定義している³⁾。また、価値意識とは、ある主体がさまざまな客体に対して下す価値判断の総体である。すなわちそれは、客体の側の属性である「価値」の主体側の対応物である。つまり、ある客体の属性を望ましいと考える主体の意識であると定義している³⁾。

このように定義された価値及び価値意識の概念に従い、スポーツの価値及び価値意識について考えてみると、スポーツの価値とは、「主体に対するスポーツの望ましい属性」と定義される。つまりスポーツの価値とは個人または集団の欲求を満たすことで望ましいとさ

*体育学 助教授

**県立新潟女子短期大学

れるスポーツの性能，性質であるといえる．また，スポーツの価値意識とは，個人または集団がスポーツを望ましいと考える意識であるといえる．つまり，人とスポーツとの関係にみられる意識であるといえる．

現代社会では，スポーツに関しての価値意識が多様化してきていることは周知の事実である．私たちの生活の中でスポーツの価値は高まり，多様な楽しみ方の広がりをみせている．これはスポーツが日常における生活や生涯の価値と深く関わりはじめたこと意味し，多様なスポーツの楽しみ方は余暇生活の中におけるスポーツの位置づけの重要性を表しているといえる．

また，この意識の多様化は，スポーツの高度化と大衆化という方向にあらわれている．スポーツの大衆化とは，スポーツ人口の増大という量的側面と，スポーツの領域・行為目的・行為方法の分化という質的側面を包括した現象である．⁶⁾また，スポーツの高度化とは，スポーツにおける技術的層化現象である．⁶⁾つまり現代社会においてスポーツの高度化とは，スポーツの大衆化における多様化の一面としてとらえることができる．

上杉は，「スポーツ行動を分析する1つの方法は，行動の背後にあるスポーツの価値意識を知ることである．」⁵⁾と述べている．

スポーツ行動は，意識的であれ，無意識的であれ，価値の選択に基づく行動であり，行為者の内部における価値選択のメカニズムを経て発現される行動である．⁶⁾つまりスポーツの多様化は，個人や集団がスポーツを実施するにあたり，多様な価値選択を行う結果あらわれる現象と考えることができる．このスポーツの多様化の問題を解決するために，スポーツ実施者の価値選択過程を明らかにすることが必要になってくる．

現在のスポーツのあり方をみると，スポーツをすることだけではなく，観戦したり，視聴したり，読んだり，会話をしたり，またスポーツ活動の運営に携わり支えるといった多様な行動が見られるようになってきている．このようなさまざまなスポーツ・ライフスタイルとの関わりから生まれてくる楽しさ，つまり「行う楽しさ」だけではなく，「見る楽しさ」「支える楽しさ」「読む楽しさ」「知る楽しさ」がスポーツの魅力ではないかと考えることができる．

時本は，「国は，1997年の保健体育審議会答申や2000年のスポーツ振興基本計画の中で，スポーツを観戦するなどの楽しさを多く経験し，スポーツに関する総合的な教養を高める「みるスポーツ」と生涯学習時代を背景とした，人の生きがいにつながる多様なスポーツへの関わり方としてスポーツ・ボランティアを例とする「ささえるスポーツ」をスポーツ文化享受の内容として，従来の「するスポーツ」に追加しました．これは，日本のスポーツ文化を考える上で，また，体育教育の内容を考える上で，大きな変化だ．」と述べている．³⁾

友添は，「スポーツはそれ自体で，きわめて豊かな学習の可能性，つまりラーナビリティを持っています．このことは逆に，スポーツは子供達にとって，多様な楽しさを秘めているということでもあるのです．スポーツとの多様なかわりから生まれてくる楽しさ，つまり「行う楽しさ」だけではなく，「見る楽しさ」「支える楽しさ」「知る 調べる楽しさ」，このような多様な楽しさがスポーツの魅力である．」としている．⁴⁾

また、中塚は、「「する」「みる」「語る」のいずれについても、それをささえる活動があって初めて成り立つ。これまでも、ささえる人がいたから成り立っていたスポーツ活動に、少しずつ、自ら志願したスポーツボランティアが登場するようになった。こうした人や意識が基盤にあって、はじめて自立したスポーツ環境と言えるのである。「ささえるスポーツ」もまたスポーツの大切な楽しみ方であり、その地位を向上させる必要がある。」とまとめている。²⁾

つまり、スポーツの根底にあるものは、「好きだから」そして「楽しいから」スポーツをする、あるいはスポーツを見る、そしてスポーツを支える、といった「無償性」「自発性」「利他性」であり、これらが今後のスポーツ振興の根幹をなす重要な領域であるのではないかと考える。

「スポーツライフ白書」では、スポーツを「する」「観る」「視る」「読む」「支える」「話す」という6つのカテゴリーについて、具体的な実施状況と今後の希望について18歳以上の男女を対象について調査している。⁷⁾

本研究においては、「スポーツライフ白書」において検討された、「する」「観る」「視る」「読む」「支える」「話す」という6つのカテゴリーを用い⁷⁾、18歳から20歳までの大学生1年生を対象にし、大学生のスポーツに対する態度や価値意識とスポーツの6つの側面との関連について明らかにすることである。

大学生にさまざまなスポーツ活動のもつ魅力や楽しさ（スポーツに関する価値）を理解させるためには、どのような方法で授業を展開していくのがよいか。その第一段階として学生のさまざまなスポーツに対する意識を把握し、今後の学生に対する教育の場面での手がかりを得るために役立てていこうとするものである。

2. 研究の方法

大学生343名を対象として、2004年7月に質問紙法による調査を行った。調査の方法は、授業時間を利用し、集団記入の形式で、調査者が説明をしながら実施した。記入漏れ、記入ミスのあったものを除き、有効回答数281、有効回収率81.9%であった。

3. 結果と考察

Table 1は、学生のスポーツが好きという意識と大学入学後体育授業以外で「する(実践)」「観戦する」「見る(視聴)する」「読む」「支える」「会話する」という6つのスポーツのカテゴリーを行ったかどうか、その関連についてみたものである。その結果1%水準で有意な関連をもつものは、スポーツを「する」「観る」「視る」「読む」「話す」という5つのカテゴリーであった。「する」スポーツについて、学生の目的は健康志向、競技志向、楽しみ志向などさまざまではあるが、学生にとってスポーツをすることは日常生活の一部になるのではないかと考える。スポーツが生活や生涯の価値と深く関わっていると学生も認識しているのではないかといえる。

「観る」スポーツについては、学生生活の中でスポーツを観戦する機会はそれほど多くあるとは考えられないが、スポーツが好きという学生はスポーツ観戦する機会を自らつくり競技場で観戦したり、学生スポーツなども観戦しているのではないかと推察する。「みる（視聴）する」スポーツは、テレビのスポーツ中継、スポーツニュースを見ている学生が多いのではないかと考える。「読む」スポーツは、毎日ほとんど目を通すと思われる新聞のスポーツ欄を読んでいるのではないかと考える。「会話する」スポーツは、プロスポーツの試合結果、選手の話

題などを話すことが学生同士のコミュニケーションの一つになっているからではないかと考えられる。「支える」スポーツについては、ボランティアとしてスポーツの運営、指導など

Table1 Experience of 6 categories, and relation of the consciousness to sports

	Chi-square	Significance
Played sports	42.4770	**
Viewed sports	17.4378	**
Watched sports	15.6821	**
Read sports	23.9350	**
Supported sports	3.5087	
Talked sports	25.9353	**

** p<0.01

を手伝うという活動がまだまだ積極的に行われていないからではないかと推察できる。

スポーツが好きで学生は、スポーツの価値を内面化していると考えられるため、このような（Table 1）結果が得られたのではないかといえる。

Table 2 は、スポーツを「する」「観る」「見る」「読む」「支える」「話す」という6つのカテゴリーについて学生が今後行ってみたいかどうかについてみたものである。「する」「観る」「読む」「話す」スポーツは1%水準で優位な関連があることがわかった。スポーツ

Table2 Relation of a student's consciousness and value of 6 categories

Value items	Chi-square	Significance
Play sports	23.71476	**
View sports	32.39258	**
Watch sports	18.62965	*
Read sports	23.71476	**
Support sports	18.27667	*
Talk sports	25.80932	**

** p<0.01

* p<0.05

に関して好意的な意識をもっている学生であるので、6つのカテゴリーすべてに関心を持ち、自らも参加してみたいと考えているのではないかといえる。Table 1 の結果では関連がみられなかった「支える」スポーツについても、学生は、今後ますます重要になってくる

スポーツ活動であることを理解し、関心を持っているのではないかと考える。その結果として、スポーツが好きで学生は、「する」だけでなく、「支える」ということに関心があるのではないかと思う。

Table 3 は、6つのカテゴリーのスポーツ活動に関する価値意識について、「非常に価値を認める」を5、「やや価値を認める」を4、「どちらともいえない」を3、「あまり価値を

認めない」を2,「ほとんど価値を認めない」を1の5段階評定で回答を求め,平均値で示したものである。価値指示傾向を見た場合,5段階評定で4.0以上の高い値を示したものは,「する」と「観戦する」スポーツの2項目であった。他の4項目も3.5以上の比較的

Table3 Mean of value items

Variable	Mean
Play sports	4.6299
View sports	4.0534
Watch sports	3.9324
Read sports	3.6085
Support sports	3.9537
Talk sports	3.6868

高い値を示していた。学生は,この6つのカテゴリーのスポーツ活動は,価値のあるものと考えているといえよう。つまり,学生の意識の中に,これらのスポーツ活動を望ましいと考える価値意識を持っていることが推察できる。

Table4は,6つのカテゴリーのスポーツに関して,今後活動したいか否かについてみたものである。

「する」スポーツは63.9%,「観る」スポーツは86.9%と活動したいとする学生の意識が高い値を

示していた。これは自ら体を動かすことの楽しさを学生は理解しているためではないかといえる。また,スポーツは,競技場へ行って生で観戦することが,テレビなどで見るより楽しいこと,興奮できることと思っているのではないかと考える。「読む」スポーツに関し

Table4 The sports categories to take part in the future

Variable	Take part in sports	Not take part in sports	Neither of them (%)
Play	63.9	6.9	29.2
View	86.9	0.0	13.1
Watch	30.8	30.8	38.5
Read	24.3	17.4	58.3
Talk	19.3	19.3	61.4
Support	28.8	15.3	55.8

ては,活字を読むのが面倒くさいという理由からではないかと考える。「話す」スポーツについては,

オリンピックのような大きなスポーツイベントがあれば友人との会話の中で話題となるのだろうが,日常生活の中で取り立ててスポーツに関しての大きな話題がない時は,会話の中でスポーツに関連することは,話さないのではないかと考える。「支える」スポーツは,28.8%の学生が参加してみたいと回答している。現在「支える」スポーツが積極的に行われているとはいえない状況であり,このことが反映してこのような結果になっているのではないかと考える。今後スポーツライフを充実させていくためには,「どちらともいえない」と回答している55.8%の学生に対し「支える」スポーツの重要性を理解させ,自ら進んで参加する態度を身につけさせるようにしなければいけないといえる。

4.まとめ

本研究では,大学生に対する教育の場面で,さまざまなスポーツ活動のもつ魅力や楽しさを理解させるために授業でどのような展開をしていくのが良いのか,その手がかりを得

るために、「する」「観る」「視る」「読む」「支える」「話す」という6つの側面について大学生を対象にし、スポーツに対する態度や価値意識とスポーツの6つの側面との関連について明らかにすることであった。

その結果、以下のことが明らかになった。

1) スポーツに好意的な意識を持っている学生は、「する」「観る」「視る」「読む」「話す」スポーツについては参加しているが、「支える」スポーツについては、参加している学生は多くなかった。これは、運営や指導などに加わってスポーツを支えることよりも自らプレイヤーとしてスポーツに参加したいと考えているからではないかといえる。今後のスポーツ振興を考えると、スポーツ活動をサポートしていくことの重要性も学生に教えていかなければならないと考える。

2) 「する」「観る」「視る」「読む」「支える」「話す」という6つのカテゴリーのスポーツに関する価値意識は、5段階評定で4.0以上の高い値を示したものは、「する」と「観戦する」スポーツ、他の4項目も3.5以上という高い値を示していた。学生は、これらのスポーツ活動は、価値のあるもの、つまり、望ましい活動と考える価値意識を持っていることが明らかになった。この価値意識が生涯変わらぬような教育を授業において、展開することが必要と考える。

3) より良いスポーツ環境を整えるためには「する」「観る」スポーツばかりでなく、「支える」スポーツの重要性、必要性をさらに認識させ、自ら進んでスポーツ・ボランティアとして活動する態度を育てていく教育も展開する必要があると考える。

References

- 1) 見田宗介, 栗原彬, 田中義久編: 社会学事典; 弘文道, 東京, pp144-150, 1992
- 2) 中塚義実: 「する・みる・語る・ささえる」スポーツの楽しさにつなぐ授業づくり; 体育科教育(52)11, pp46-51, 2004
- 3) 時本識資: 「する」「みる」「ささえる」「知る」スポーツから; 体育科教育(52)11, pp34-37, 2004
- 4) 友添秀則: スポーツの楽しさを保障する体育の授業づくりの意義 - 「行う」「見る」「支える」「知る」楽しさから - ; 体育科教育, (52)11, pp18-21, 2004
- 5) 上杉正幸: 大学生のスポーツ価値意識のパターンとその関連要因の分析; 体育・スポーツ社会学研究会編, 体育・スポーツ社会学研究 6, 道和書院: 東京 pp. 195-213. 1987
- 6) 上杉正幸: スポーツ価値意識論の方向性; 体育社会学研究会編, 体育社会学研究 6, 道和書院, 東京 pp. 193-211. 1977
- 7) 財団法人余暇開発センター: スポーツライフ白書; 財団法人余暇開発センター, ぎょうせい, 東京, 1998